

## 「見る」とはなにか

京都府  
京都府立嵯峨野高等学校  
中村七海

## 1 分科会テーマとの関わり

京都の寺社仏閣は、文化財を見に来る観光客で常にあふれている。「見る」という行為には観察・観賞・閲覧など様々あるが、鑑賞という言葉は対象が人の作った作品である場合にのみ使用される。それでは、私たちは作品から何を見取っているのだろうか。文化財は既に評価の定まった不易なものだから「見る」価値があるのか、生徒達が興味関心を持つ、ファッションやゲームなど流行のものを「見る」と異なるのか。鑑賞において、生徒達が「見る」ことにより何を学ぶのか、我々教員はどのように「見る」を指導すれば良いのだろうか。

## 2 はじめに

京都府立嵯峨野高等学校（以下、本校という）の生徒の多くは知的好奇心が強く、何事にも意欲的に取り組むことができる。また、学校から徒歩10分程の所に国宝弥勒菩薩像で有名な広隆寺があるなど文化環境に恵まれている。このような立地にあって、教室で教科書に掲載された弥勒菩薩像の図版を見ている事に疑問を感じ、平成30年度から美術Ⅰの授業で広隆寺を訪れ実物を見る取り組みを始めた。どのようにすれば実物を見る機会をより深い学びに繋げられるのか、指導計画の作成にあたり、京都市立芸術大学美術学部教育学の横田学教授及び日本画の川嶋渉教授の助言のもと、以下のような「見る」を育む一連の授業展開を検討し実施した。

## (1) 題材の概要

科目名	題材の授業時間	対象生徒	新学習指導要領上の扱い
美術Ⅰ	実物鑑賞6時間・教室6時間	1学年49名・2学年14名	B鑑賞(1)イ

## (2) 題材の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
形や色彩、材料、質感、空間などに着目し、価値意識をもって印象などを捉えることができる。	受け継がれてきた美意識、創造性などを感じ取り、生活や社会の中の美術の働きを考え、鑑賞できる。	文化財の特色、よさや美しさなどに関心をもち、意欲的に「見る」ことを意識して鑑賞に取り組もうとする。

### 3 実践

#### (1) 1学期

生徒達にとっては、教科書などの図版や写真で学習する事が日常であり、見た感想を書かせても、教員の意図や期待を見透かしたような流暢な回答がなされることが多い。しかし、これらの文章が本当に「見る力」から生み出されたものだろうか。

1学期の実物鑑賞では、先入観を持たせぬよう具体的な事前学習は行わず、弥勒菩薩像をはじめ、多くの仏像が安置されている広隆寺宝物殿内で、可能な限り既習の知識に頼らずに見るために以下のような授業を実施した。

活動① 実物鑑賞	○見て気付いた事を短文で記入する活動を通し、実物を実感的に「見る」活動から得られたことを言語化し記録する。 ○ワークシート：1行毎に連番を付した罫紙
活動② 事後指導	○収集した短文を各自が考えるカテゴリーに分類（例、雰囲気・造形・想像・色・知識など大きな括弧を設定）し、分類した項目と言葉から、自分がどのような視点で鑑賞しているのか気付かせる。

この取り組みの結果は惨憺たるものであった。自分たちに何が求められているのか不明なまま「見る」を丸投げされた生徒達は、罫紙の番号を意識し、数多く書くことが課題だと勘違いした。番号を埋めようと、目に入ったものを手当たり次第に記入し、「右手が上がっている」「指が折れている」「棒を持っている」等、視覚として見えている情報を羅列し、見て感じた感性的な言葉は極端に少なかった。殆どの生徒は、ワークシートを埋めると作品をそれ以上味わうことなく、早々に宝物殿を出てしまった。事後学習での言葉の分類では、多くの記述が客観的な情報であるため、頭・体・台座…と言った分類項目にしかならず、個人の物の見方や感じ方に言及することはもとより、わざわざ実物を見に行った教育的効果も実感することができなかった。

#### (2) 2学期

2学期は実物鑑賞の対象を龍安寺の石庭とし、石庭の縁側に腰かけ1時間ほど鑑賞した。

活動 事後指導	○1学期の取り組みの課題の解決策として、単純に目に見える視覚による情報だけではなく、見た時の自身の感覚に着目させる。 ○ワークシート：以下の4つの視点を示した改良ワークシート 1. 知っていることについて 2. 見えていることについて 3. 見えないことについて 4. 3に関し、どうしてそう感じたのか
------------	--

上記のような、具体的な視点を与えたにもかかわらず、1、2の質問についてはほとんど言葉が出なかった。3、4は生徒によって取り組みに差が出た。一方、事前の予測では、まだ残暑の厳しい時期でもあり、集中して見ることに取り組めるかどうか危惧したが、生徒の反応は思いのほか意欲的であり、終了の合図を出すまで時間一杯楽しんでた。

この生徒の見ることに對する前向きな姿勢とワークシートの不十分な結果の乖離について、前述の大学教授らと検討を行った。その結果、言葉を出にくくしてしまった要因は、既成の知識を問う質問が最初にあり、敷居を高くしてしまったワークシートの順番の問題、また、質問の内容自体が生徒を強制的に誘導しようとするものであったことではないか。さらに、見ることに對して自分が自由であることを前提として、見た後に生徒一人一

## 口頭発表2

人の内面に生じることに自ら気付かせることが本来の目標ではないかなどの指摘がなされた。

実物鑑賞の後、日本画作品を制作者の心情や表現意図の視点で読み解き、追体験としての日本画模写を行う授業を実施。主体的に見ることを意識させた。次にこの経験を元に小論文を書かせると、主題は多岐におよび、絵を描くことに苦手意識を持っている生徒でも、意欲的な取組が見られた。個性的な着眼点から独自の見解を披露した生徒もあり、個々の興味関心や、作品を見ている視点など、描く活動とも関連させて、その多様性についてあらためて知ることとなった。

## (3) 3学期

3学期の実物鑑賞の対象は、妙心寺の大天井画、狩野探幽「鳴き竜」とした。冬の京都、寺院内素足での鑑賞だったが、「見る場所によって竜の様子が異なる」「墨の色に迫力がある」など、前述の日本画論文を書いた影響か、生徒同士、小声で話し合っている姿なども見られた。さらに、床に寝転がって見上げるのがよいと説明されると、冷たい瓦床に長い間寝転がって見ている生徒の姿もあった。授業時数が少なく、実物鑑賞は予定に入れていなかったが、生徒から希望が強く実施した取り組みであった。この1年間の「見る」をテーマとした鑑賞の取り組みの締めくくりとして生徒達が書いた、以下の『見るとは何か』の記述からも、生徒の主体的に「見たい」という思いの高まりを実感することができた。

『広隆寺に行ったとき、たくさんの仏像を見た。中でも私が気に入ったのは、鬼の上に立ってこちらを睨んでいる像だった。しかし、近づいてよく見てみると、その目はなぜか悲しそうだった。作者不詳であったが、その目の悲しさは作者の感情ではないかと思った。また、日本画の授業で橋本閑雪の絵を模写した。馬が好きだという理由だけで選んだ「意馬心猿」という作品だったが、よく観察するうちに、馬の表情に不安や怯えのような感情が写し出されていることに気付いた。論文のテーマでこの馬の表情について調べ、閑雪は中国が好きだったが、この絵が描かれている頃、日中関係がどんどん悪くなっており、この出来事に対する思いが込められているという結論を出すことができた。作品を作るとき、ほとんどの場合私たちはテーマを持って創作する。しかし、どれだけ忠実にテーマに沿おうとしても、感情は作品に表れる。作品と向き合い作者の思いを「見る」ことで、私は作者と感情を共有できているような気持ちになる。』

『僕は「見る」とは想像する事と表裏一体なのではないかと考える。ただ情報を視覚的に得るだけでなく、そこから自分がどのような自由な発想で「見る」ことが出来るかが「見る」ことの醍醐味ではないだろうか。例えば、2学期に授業内で訪れた龍安寺の石庭は、白石、岩、土壁とシンプルな構成になっている。人はその石庭がどのようなメッセージを持っているのか、作者の意図は何なのか様々に想像する。答えはない。しかし、答えがないので様々な解釈がありえるし、それらに触れることが自分の「見る」を肥やしてくれるのだ。龍安寺の石庭が日本人、外国人問わず幅広く受け入れられるのは、日々の喧騒から離れ、静かな環境で様々に思いを巡らすことが僕たちにとって新鮮であり、「見る」ことがこのような効果を持っているのだと再認識できるからなのかもしれない。僕は石庭を見ながら想像した。』

#### 4 考察

1年間の授業終了後、「文化に関する世論調査」（平成28年度 内閣府）から鑑賞に関する項目を抜粋し、①鑑賞の授業を受けた生徒（63名）と②受けなかった生徒（50名）の2群に分けて<sup>1</sup>質問紙調査を行った結果、以下のような傾向が見られた。

「文化芸術体験について、あなたが期待する効果は何ですか」という問に対し。

- ① 鑑賞の授業を受けた生徒群は「他者の気持ちを理解したり思いやったりするようになる」という回答を重視
  - ② 鑑賞の授業を受けなかった生徒群は「コミュニケーション能力が高まる」を重視
- アクティブ・ラーニングの視点に立って作品を見て意見を出し合う、いわゆる対話型鑑賞学習は作品をしっかりと観察することに効果的であり、コミュニケーション能力の育成に繋がるとも言われている。しかし、「見る」を育む教育も発達の視点に立って考えるならば、高校生にとっての「見る」活動を通して学ぶ事は「コミュニケーション能力」の育成に留まっていたはならない。「見る」授業の題材としては、既に価値の定まった文化財など不易なものを対象とする方が教材化しやすい。しかしながら、芸術の「見る」とはその見る対象が不易なものとか流行のものとかと言った事に関係なく、まるで初めて「見る」かのように真に「自分の目で見ることができ」ることに意義があるのではないだろうか。人と対話する以前に、自己との対話によって見たり感じたりしたことをより深めることが必要である。また単に知識や既成概念を紡ぐ「連想」ではなく、新たな価値観の「創造」に繋がって欲しい。分かったつもりではなく、分からないことを前提にして、自分の五感で感じてみよう、対象に寄り添い手を伸ばす「共感する力」が高等学校の鑑賞における深い学びに繋がるのではないだろうか。「見たい」と思う鑑賞のエネルギーは「見えていない」に気付くことが前提であろう。

#### 5 結論

近年、鑑賞教育が美術授業の中で注目されるようになってきた。しかしながら、未だに鑑賞教育の目標が美術作品や美術史に関する知識の習得であると思われる事も多い。筆者は今回の一連の実践によって、高等学校の鑑賞教育とは、生徒自身が「見えていない」自分に気付き、何かありそうだと「自分の目を開ける」主体的な好奇心を生み出し、自分にはまだ見えない物に寄り添い「見ようとする」共感する力を育むことにあるという事を実感した。そして、教師の役割は授業の中に、前述したような生徒の気付きや主体的な好奇心を引き出すような場や仕掛けを設定することだと考える。

多文化共生の未来を創造していく生徒達に「見る」を育む授業展開を今後も模索して行きたい。

最後に、この授業の趣旨を理解し、快く生徒達の鑑賞に協力して頂いた、広隆寺、龍安寺妙心寺の皆様方に心から感謝します。本当にありがとうございました。

<sup>1</sup>美術Ⅰ選択生徒63名と工芸Ⅰ選択生徒50名である。選択教科による思考的傾向である可能性もある。